

仮死埋葬空想の精神分析理論

富松 良介

はじめに 一死の表象不可能性から仮死の空想へ

死の不安、死の願望、死の欲動など、「死」は精神分析の枢要な主題である。だが、死を正面から語るとき、Freud,S.は必ずある壁に突き当たる。たとえば、「無意識は己の死すべき定めを表象しうる領域を、今も昔と変わらず殆ど備えていない」(GW12:225)、「死は否定的な内容をもつ抽象概念であり、無意識にその対応を見出せない」(GW13:288)、「無意識には我々の生命の絶滅という概念は存在しない」(GW14:160)といったように、幾分の諦念を漂わせつつ、こうして死を語る Freud,S.の眼前には、いつも表象不可能性という名の壁が立ちはだかっている。

しかし、Freud,S.の指定した無意識は、死自体を表象できない代わりに、死に纏わる多様な「空想」を産み出していく。『無気味なもの』(1919)の第2章で、Freud,S.は最も恐怖を惹起させる空想として、死・屍体・死者の再来・精霊・幽霊を挙げている(GW12:224)。死は、こうした空想である限りにおいて精神分析の対象となり得るだろう。そして、章末に Freud,S.が掲げた、あるひとつの死の空想は、その中でも最高位(Krone)を授けられた無気味なものである。

多くの人が無気味なものの極地(Krone)に割り当てるのは、仮死状態(scheintot)で埋葬されることであろう。しかし、この恐ろしい空想は、別の空想が姿を変えたもので、本来の恐怖と異なり、ある種の快楽を孕むことを精神分析は知っている。すなわち母胎内生活の空想である(GW12:257)。

死なずに生きたまま埋葬されるという空想は、極限の恐怖を醸しながら母胎内生活空想の快楽に結びつく。この一節は、生死の定まらない「仮死状態」での埋葬という独特な空想において、最大の恐怖と快楽が体験されることを示唆している。Freud,S.はこの無気味な空想について、なぜそれが恐怖の極みであり、なぜ取り上げたのかという根拠や、精神分析理論に占める意義を十分説明していない。しかし、精神分析が死に対して表象の限界を知り、死の空想のうちに探究の糸口を見出すならば、その究極に属する空想は考察に値すると思われる。Freud,S.の個人史や精神分析理論に照らす仕方では、「死」の問題は従来多く語られてきたが(Schur1972; Gay1988)、「仮死」の主題はどれだけ論じられてきただろうか。本稿は、Freud,S.の仄めかしたこの究極の空想を「仮死埋葬空想」と呼称し、精神分析理論の形成過程にこれがいかに関与していくかについて探究する¹。以下では、精神分析史を便宜的に五期に区切り、Freud,S.の仮死埋葬空想に関する思考を跡づける。そして、精神分析における死の問題を再考するための、「仮死」という新たな視座の意義を論じるものとする。

1. エディプス・コンプレックス発見以前 —『ヒステリー研究』

まず初期の『ヒステリー研究』(1895)に、仮死埋葬空想に関する Freud,S.の足跡を辿りたい。すなわち Freud,S.が Breuer,J.の除反応の技法を初めて本格的に用いた、エミー・フォン・N夫人(Frau Emmy von N)の症例である。本症例を一つの契機として Freud,S.は催眠を放棄し、自由連想法を創案し、Breuer,J.から出立していく。ゆえにエミー夫人は精神分析の黎明期における重要な症例であり、「フロイトが生涯を通して感謝していた案内人の一人」(Gay,P.1988)として評価されている。

エミー夫人は、突然話を中断しては顔を歪めて恐怖と嫌悪の表情を露わにし、「動かないで！ 何も言わないで！ 私に触らないで！」と叫ぶヒステリー性の幻覚と譫妄を主症状としながら、また舌打ちを伴うチックや動物恐怖症も患っていた。Freud,S.は1889年5月1日に始まる3週間の治療記録を報告しているが、その5月11日夕刻の記録に、夫人の生涯で最も強烈に体験され、かつ最も頻繁に回想される記憶として、次の話が残されているⁱⁱ。ある海岸の街で、夫が心臓麻痺で突然倒れて死んだように横臥し、再び起きた。その後、朝食中に夫が突然立って妙な眼差しで夫人を見つめ、歩いて床に倒れた。夫人は医師が夫に蘇生術を施す音を隣室で聞いていたが、夫は結局助からずに亡くなった。この回想に触れて、Freud,S.は「総括」にこう書いている。

最後に、彼女には生き埋めにされるという恐怖症があった。この恐怖症は神経症者に極めて頻繁に見られるものである。夫の屍体が運ばれた時、死んでいないと彼女が信じていた点で、この恐怖症は完全に解明される。この信念には、愛する人との共同生活が突然断たれるのを考えられないという彼女の想いが、感動的なまでに表われている(GWI:143-144)。

「夫の死」の体験と記憶は、夫人にとって最も衝撃的な外傷として、本症例の核心と見做されたものであるが、夫人は夫の死と喪失を認められず、まだ生きているという信念を抱いており、それを Freud,S.は「仮死埋葬の恐怖症」という彼女の神経症の根拠とした。ところが、この恐怖症は症例の概要には書かれず、総括で初めて言及され、その詳細も不明である。つまり、仮死埋葬の恐怖症というテーマは、議論の周辺に置かれているのである。こうした Freud,S.の思考を探究するには、Freud,S.と患者の治療過程に何が起こっていたのかを詳細に振り返る必要があると思われる。

5月11日夕刻、夫の死をめぐる話題に続いて、夫人は娘の煩わしさについて不満を語る。だが Freud,S.は口を挟み、夫人の語った全回想の除反応を図る。その直後、夫人は患者に凄惨な仕打ちを与える癲狂院の恐怖を語り、Freud,S.は自分のことを信頼するようにと夫人に言い聞かせる。翌12日、鼠や蛙など夫人に死を連想させる動物の幻視体験が語られると、Freud,S.はまた口を挟む。ここで夫人は「質問ばかりしないで最後まで話させて下さい！」と強く訴える。Freud,S.がそれに同意すると、夫人は夫の死を信じられなかったという想いを初めて語り、次いで娘が自分を煩わせさえしなければ、夫を看病して回復させられたかもしれないかと、娘に対する憎しみを口にした。

この過程に生じていることは、夫人から「死」に纏わる何かが語られると Freud,S.はその記憶を除去しようとし、だが患者はまだ言いたげで、掣肘を加える分析家に対して、言外に、あるいは直接に不満を向けるという事態の反復である。他にも夫人は、最早期記憶として、兄に死んだ動物を投げつけられて気絶したこと(5歳時)、棺のなかの姉を見たこと(7歳時) 幽霊を装った兄に脅かされたこと(8歳時)、棺に眠る叔母の下顎が落ちるのを目撃したこと(9歳時)など、「死」に関わる内容

を多く語っている。しかし、Freud,S.はこの動物恐怖を十分に扱えず、死んだ動物の象徴性について考察を怠ったことなどを告白している。本症例において、Freud,S.の主たる目的は、除反応という方法によって、患者の外傷を詳らかにし、その恐怖や記憶を「除去すること」に向けられていた。すなわち、催眠下で患者に外傷体験を仔細漏らさず語らせ、それにまつわる感情と記憶を消し去ることがヒステリー治療の眼目であった。だが、Freud,S.が必死にその除反応に努めたエミー夫人の外傷体験は、尽く「死」に関わっているのである。ここに我々は、「死」の問題に惹かれながらも、その「死」を遠ざけようとする Freud,S.の思考の動きを捉えられないだろうか。仮死埋葬の恐怖症が議論の周辺に置かれた背景には、まずこうした思考が影響しているように思われる。

加えて、当時の Freud,S.の「性」に対する捉え方も注目すべき点がある。『ヒステリー研究』所収の論文「ヒステリーの心理療法」の中で、Freud,S.は「エミー・フォン・N 夫人の分析を始めた当時、ヒステリーの根底に性的な神経症があるという期待はかなり薄かった。というのも、私はシャルコー学派から出てきたばかりで、ヒステリーを性の主題と結びつけるのをある種の侮辱と考えていたからである」(GW1:257)と述べている。すなわち、ヒステリーの病因として「性」を中心に置くことに、Freud,S.は否定的であったのである。しかし、仮死埋葬の恐怖症は「神経症者に極めて頻繁に見られる」とされ、本症例に特異な病理ではなく、むしろ神経症の一般的分類として位置づけられるばかりか、ヒステリーと「死」を結ぶ視座を Freud,S.が有していた可能性を示唆している。後年、Freud,S.は本症例を性の抑圧に起因する不安神経症と見立て直すが、当時はヒステリーの病因として「性」よりも「死」を重視していたように思える。たとえば、1897年2月8日付の Fliess,W.宛書簡で、Freud,S.は「最新の成果はヒステリー性硬直痙攣の解決です。それは死後硬直を伴う死の模倣、つまり、死人との同一視です。もし彼女が死人を見たことがあれば、その場合は目はどんよりとし、口が開きます。もしそうでなければ、その場合は彼女は静かに平和に横たわります」と書いている。ここでもヒステリー症状と「死」の関連が示唆されている。およそエミー夫人の症例において、Freud,S.は「性」を侮辱として斥け、「死」に密かな関心を寄せていた。しかし、Freud,S.は患者の語る「死」を扱い切れず、除反応によって「死」を遠ざけようとした。その中で Freud,S.が神経症一般の理解に用い得たのが、「仮死」という主題だったのではあるまいか。

エミー夫人の治療時期(1889～1890年)は神経症理論の草創期に当たり、Freud,S.はヒステリーの外傷理論(誘惑理論)を提唱していた。これは後に、心的現実(空想)を重視する欲動病因論へ転回し(1897年9月21日付の Fliess,W.宛書簡)、エディプス・コンプレックス発見(同年10月15日)へ導かれていくが、仮死埋葬の恐怖症はこの変遷の起点に位置している。すなわち、エディプス・コンプレックス発見以前、死と性の狭間で揺れる Freud,S.の思考を、「仮死」の主題が占めていたように思われるのである。しかし、仮死埋葬の恐怖症の機制とヒステリーの病因論において、死と性の関係は不明瞭である。その理論的な不備に Freud,S.の最も傍にいた同僚は気づいていたに違いない。1899年8月1日付の Fliess,W.宛書簡で、Freud,S.は Breuer,J.から受けたというある指摘に触れ、「彼は、僕が僕の思考のなかで死と性の結び付きがどの点にあるのか詳しく説明していないという意見でした」と綴っているⁱⁱⁱ。Breuer,J.に指摘された瑕疵に対して、この時代の Freud,S.の「思考」は明確な回答を用意できていない。しかし、Freud,S.の「無意識の思考」は、エディプス・コンプレックスという全く新しい死と性の結節点を見出していくことになる。

2. 世紀末から 20 世紀初頭—母コンプレックスと父コンプレックスの狭間で

『ヒステリー研究』を中心とする精神分析の揺籃期に温められた Freud,S.の思考は、Flieiss,W.との交流と自己分析を経て、『夢判断』(1900)として結実する。精神分析の誕生を標すこの記念碑的作品の第 6 章「夢の作業」の E 節で、我々は Freud,S.が「風景」の夢象徴に言及した箇所に着目したい。Freud,S.は、かつて一度来たことがあるという既視感を覚えるような風景の夢において、「その場所は常に母親の性器である」(GW2/3:404)と述べる。また不安恐怖を伴う、狭い場所を通ったり水中に居たりする内容の夢は、母胎内生活や出産に関する空想に基づくものとされ、この一見快楽に満ちた母胎のうちに不安の闇が潜むことが指摘される。さらに Freud,S.は、運よく母胎内にいて両親の性交を覗き見できたという空想を抱く若い男の夢も例示している。すなわち Freud,S.の思考のなかで、「母胎」は性の快楽と不安が混然一体とした象徴として扱われることになったのである。そして、この一連の考察の後に、Freud,S.は 1909 年に次の註を付すことになる。

母胎内生活に関する空想と無意識的思考の意味を、私は後になって評価できた。それらの空想と思考は、生き埋めにされるという、きわめて多くの人々の奇妙な不安を解明する糸口であり、かつ死後の生命という信念の最も深い無意識の根拠を含んでいる。その信念は、誕生以前の生という無気味なものの未来への投影である。ちなみに出産行為は、最初の不安体験、不安感情の源泉および範例である (GW2/3:405-406)。

ここで Freud,S.は初めて、母胎内生活空想を「仮死埋葬空想」に結びつける。仮死(生き埋め)と性(母胎)が、快楽と不安を孕んだ母親との関係の下に結ばれ、出産が不安の源泉として位置づけられたのである。この解釈は『ヒステリー研究』には見られなかったものである。換言すれば、エミー夫人の仮死埋葬の恐怖症において、夫の死を否認する「死後の生命」の信念は、母胎内生活の不安が投影されたものという説明原理をここで獲得したことになるだろう。『無気味なもの』(1919)で、仮死埋葬空想を母胎内生活空想として解釈した際も、Freud,S.は既視感を伴う風景の夢象徴に触れて「必ず女性性器または母胎と見做してよい」(GW12:259)と確言し、母胎を不安の源として強調しているが、この仮死と母胎を結ぶ発想は、およそ『夢判断』の書かれた世紀末から註の追加された 1909 年頃にかけて醸成されたものと推定できる^{iv)}。その傍証として、Freud,S.と弟子の Binswanger,L.のあいだで同じ 1909 年に交わされた書簡を次に取り上げたい。

Binswanger,L.はイルマ(Irma)という名の重症ヒステリー女性患者を治療していた。彼女は「これから墓を掘って、屍体を食わなくてはならない」「私は今、お墓の中にいる。誰か女の人がいて、私を噛んでいる」と喚き、家政婦のフォール嬢(Faure)という名の人物を幻覚にみた。また、この家政婦は以前に精神異常に陥り、「まだ生きているうちに埋めないで!」と叫んだという。Freud,S.は Binswanger,L.宛の書簡(1909 年 5 月 17 日)で、この症例に対して次のコメントを書いている。

さて、《棺》とか《生き埋め》とか《誰かといっしょに埋葬される》……などの空想についての最終的解釈がまだ残っています。そこで、《棺》すなわち《母胎》、《生き埋め》すなわち《子宮内生活》と解釈されます。すると、これらの空想は、母胎内への復帰、つまり母親代理人物フォール嬢の胎内への復帰を意味しています。(…)第三の空想、《他人といっしょに埋葬される》という場合、いう

までもないことですが、『埋葬』すなわち『就床』を意味しますので、これはだれかがいっしょに添い寝することを意味します(竹内・竹内訳 pp22)。

Freud,S.は、棺を母胎として、生き埋め(仮死埋葬)を母胎内生活として解釈し、イルマのヒステリー一症状にみられる空想に母胎への回帰願望を捉えている。すなわち、かつて1900年に『夢判断』で呈示された快楽と不安の座としての「母胎」の象徴および母胎内生活空想は、この1909年の書簡において「仮死埋葬空想」と結びつくのである。加えてFreud,S.は、仮死埋葬空想の主体が単独の場合は母胎回帰願望、二人一緒に埋められる場合は就床であるとして、その解釈を拡大している。Binswanger,L.(1956)によれば、Freud,S.はイルマの病歴について「口唇帯への移動と結びついた同性愛的要素」を問題にしていたとされ、「墓を掘って屍体を食べる」「墓の中で女に噛まれる」といったイルマの叫びは確かに口唇愛的な欲動も示唆している。さらにFreud,S.は同書簡でヒステリーにおける同一化の機制に触れて、「このようにしてみると、すべてのことが典型的な通路で母コンプレックスに通じているように思います。ヒステリーの患者は、子どもが欲しいと思うと、母親と同一化(identifizieren)し、ついには自分自身が母胎内の子どもになってしまうのです」と書いている。

つまり、1909年頃のFreud,S.は、死と性について「母コンプレックス」を中心として結びつけ、仮死埋葬空想をそれに代表させていたと考えられるのである。エミー夫人の症例に比して、ここで仮死埋葬空想における「性」の要素が、母親と関連づけられて強調された点は示唆に富む。また他人の臨床事例の解釈に用いるほどに、Freud,S.はこの空想を重視していたようにも思われる。しかし、Freud,S.はこの時代、死と性を結ぶ根本的な不安として、また母コンプレックスに関わる空想として、ヒステリーの神経症理論体系の中心に仮死埋葬空想を取り入れなかった。それは、『夢判断』(1900)を著していたFreud,S.が、母コンプレックスではなく、父コンプレックス(Vaterkomplex)に思考を向け始めたことと関わるだろう。但し、Freud,S.はむしろ自然発生的な小児性欲に着目し、1897年のその発見以後、エディプス・コンプレックスは20年間に亘って理論体系の周辺に置かれることになる(Laplanche et Pontalis 1985)。つまり、世紀末から20世紀初頭の時期は、小児性欲とエディプス・コンプレックスを繋ぐ独自の性理論をFreud,S.が築き上げていく途上でもあった。1909年に『夢判断』に追加された註とBinswanger,L.への書簡は、その構築物を支える大地の奥底で、母コンプレックスと結ばれた仮死埋葬空想が脈々と流れていることを証示していないだろうか。

3. 1910年代—死せる父の夢表象

『精神現象の二原則に関する定式』(1911)の掉尾を、Freud,S.はある夢で飾っている。その夢では不治の病で死んだ父がまだ生きており、だが夢見手の息子は、父がすでに死んでいることを知らないのを心苦しく思う。Freud,S.はこの夢テキストの上に、[息子の望み通り・望んだために]父は死んでいる、[息子がそれを望んでいたことを]父は知らなかったと書き加え、息子の抑圧された願望を明らかにした。すなわち、父に対する死の願望を認めることへの苦痛、および生前の父にその願望を知られることへの恐怖(去勢不安)という、エディプス・コンプレックスに彩られた夢思想を浮き彫りにしたのである。また、これとよく似た夢が『精神分析入門』(1916—1917)の第12講「夢の分析例」にも現れる。「父親は死んだが、死体が掘り返された。具合が悪そうに見えた。それ以来、父親は生き続け、夢見手は父が死んでいることに気づかないよう、あらゆることをする」(GW11:191)

という夢である。Freud,S.によれば、死者を生き返らせたいという願望と、父への死の願望が妥協した結果、生死の境にある父親の夢表象が形成されたという。

この二つの夢には、「死せる父」が「生きた屍体」として共に登場する。我々は生死の境を彷徨うこの存在から、「仮死」の主題を見出したいくなるだろう。掘り返された屍体が生きているという情景は、まさしく仮死埋葬空想の劇化されたもののように思われるからである。しかし、Freud,S.がこれらの夢においてその眼差しを向けたのは、生死の定まらない「仮死」の無気味さや恐怖に対してではなく、死んだはずの父親が生きているという「荒唐無稽性」に対してであった。

『夢判断』(1900)第6章中の「荒唐無稽な夢」という節で、Freud,S.は死んだ人が生きているという夢の荒唐無稽性に着目し、考察を行っている。まず死者の夢の荒唐無稽性は、たとえば、「父が死ねばいいのに」といった願望に対する「極度の拒否」に由来するという。また愛する人の死の夢には、夢見手の死者に対する両価的感情が伴い、死者の「生と死の交代」がしばしば起こる。しかし、夢見手は死者に対する「無関心」を装うという。Freud,S.によれば、その無関心は「死者はすでに死んでいる」ということを知りたくないという拒否に由来し、それゆえ夢見手は「死者と同一化する」(GW2/3:433)という。その同一化は夢見手が自分の「死」を見ることであり、しかし本人は死の意味を知ることを激しく拒否するだろう。「死者の夢」の荒唐無稽性とは、このような死の願望や死の不安への拒絶的な態度によって構成されるというのである。

要するに、Freud,S.が生と死の境に遊弋する「死者の夢」から解釈した夢思想は、母コンプレックスではなく、死の願望・去勢不安・両価的感情などから成るエディプス・コンプレックスなのである。墓から掘り返された「仮死」の死者を前にして、Freud,S.はその情景の醸し出す無気味さに対してではなく、その荒唐無稽な装いの方を解釈する。換言すれば、同一化の対象は、仮死埋葬空想と結ばれた母親(母胎)ではなく、死せる父親(死者)であり、そこで強調される感情は、母胎内生活の快楽や不安ではなく、息子が父親に対して抱く心苦しさ(罪悪感)の方である。

こうした失われた対象(死者)との同一化と、それに伴う苦痛は、『喪とメランコリー』(1917)の主題へと繋がっていくだろう。そこでFreud,S.が示したのは、愛する者を喪いメランコリーを呈する患者が、両価的感情の葛藤に繫縛されているという事実であった。彼らは誰を亡くしたかは知っていても何を喪ったかを知らず、その行き場を見失ったリビドー(攻撃性)は、他の対象へ移されずに元の対象と癒着した自我へ退行する。ゆえに患者は自分自身を責めているようで、本来は亡き人を責めている。いわば愛する対象への隠された憎悪が、「対象の亡霊(Der Schatten des Objekts)」(GW10:435)として自我に憑いた状態こそ、メランコリーという病に他ならない。死者との同一化は、このように自己愛の導入と結びつく仕方で、精神分析理論のうちに深く根を下ろすことになる。

では、1910年代の精神分析において、仮死の問題がエディプス・コンプレックスの文脈で解釈される中で、「母胎内生活空想」のテーマはどのように位置づけられたのか。この時代はFreud,S.が「空想の起源」について思索を深めていた時でもあり、『狼男症例』(1918)との出逢いがその重要な契機となる。子どもの目撃した両親の性交場面(原光景)は実際の出来事か、それとも空想かという難問を提起したこの症例のなかで、母胎内生活空想の問題が議論されている。狼男は「この世界が一枚のヴェールで覆われているようだ」と言い、自分が世界から隔てられているような奇妙な感覚を訴えていた。しかし、狼男によると、付き添いの男に浣腸をしてもらって排便を済ませると、このヴェールが破れて健康を取り戻せたように感じられたという。Freud,S.はこのヴェールを母胎と解

積し、世界から逃避したいと願う狼男の「母胎内生活空想」による産物と見做す。本症例で重視された心的機制は、同性愛的な態度による母親との同一化である。そのため、狼男の母胎内生活空想は、性交の際に父親から愛される母親の役割を自ら演じたいがために、母胎に入ろうとする願望とされた。ここで母胎内生活空想は、女性的な態度に基づく父親との性交の願望によるものとして位置づけられたのである。ゆえに浣腸でヴェールを破ってくれる男は父親、浣腸は性交の表現であり、また排便される大便は子どもであり、かつ狼男自身を意味するとして、Freud,S.は去勢コンプレックスとの関わりを意識して考察を行っている^{vi}。狼男にとって母親は「死の不安」と固く結びつく存在であったため、母胎内生活空想には死の要素も垣間見えるものの、しかし Freud,S.は「父親との結合」と去勢コンプレックスの視座からこれを捉えているように思われる。

精神分析にとって 1910 年代は、他にも『トーテムとタブー』(1913)に代表されるように、エディプス・コンプレックスが人類の宗教・文化の説明原理に拡大され、原父殺害説が提唱される時期でもある。この潮流のなかで、仮死埋葬空想は母コンプレックスからエディプス・コンプレックスにその基盤を移され、「死せる父」という夢表象に様式を変え、母胎内生活空想は同性愛的な態度と去勢コンプレックスの文脈から語られるようになっていくのである。

4. 1919～1920 年 一知的な不確実さと去勢不安の相克

第一次世界大戦の戦禍を経験し、精神分析は「死」の主題に傾倒していく。その中で Freud,S.が再び仮死埋葬空想の問題を扱った論文が『無気味なもの』(1919)である。Freud,S.は無気味ものの核(Kern)をめぐる、心理学者 Jentsch,E.の提唱した「知的な不確実さ(der intellektuellen Unsicherheit)」(GW7:231)なる概念の批判から議論を始める。この概念は「見た目は生きているようでも本当にそうなのかという疑惑、逆に生命のない事物にひょっとしたら生命があるのではないかという疑惑」(GW7:237)を意味し、蠟人形や精巧な人形、癲癇発作や狂気の発現から感受されるという。この概念は端的に「仮死」の主題と関わるものと思われる。だが Freud,S.はこの概念を斥け、第 1 章において、無気味なもの(Unheimlich)の語が「馴れ親しんだもの」を同時に含意することを語彙論から仮説立てる。そして、第 2 章で Hofmann,E.T.A.の幻想小説『砂男(Der Sandmann)』の分析を通して、「無気味なものとは、馴れ親しんだ、馴染みのものであり、それが抑圧されて回帰してきたものである」(GW7:259)とする自説の妥当性の証明に取りかかる。

この小説は、眼球を抉り出す砂男を怖れる主人公ナターニエル(Nathaniel)の数奇な体験、まるで生きているような自動人形オリンピア(Olimpia)への愛、そして狂気に陥る結末を描く。Jentsch,E.は「知的な不確実さ」を惹起させる人形オリンピアこそ無気味さの要因と見做すが、Freud,S.は「去勢不安」を惹起させる眼玉を抉る砂男こそ、無気味さの源であると批判する。すなわち Freud,S.は、オリンピアを、女性になって父親から愛されたいと願う主人公の「女性的な態度が物質化されたもの」(GW7:244)と見做し、去勢不安の脅えと同性愛(自己愛)的な態度に基づくコンプレックスが分離されてオリンピアに結像したと述べる。そして Freud,S.は二重身・反復強迫・死者の再来といった無気味さの範例を列挙し、本稿の冒頭で述べた仮死埋葬空想の議論でもって、第 2 章を締め括る。

しかし、第 3 章の冒頭で Freud,S.は、「無気味なもの」の自らの定義に背馳する題材(童話や虚構作品)を取り上げ、既に斥けた Jentsch,E.の「知的な不確実さ」を「全く無視してしまつてよいのだろうか」(GW7:261)と突然顧みる。ここで Freud,S.は、無気味なものの「体験」と「想像」を区別

する。前者は、思考の万能や死者の甦りを範例とする体験であり、原始社会の思考では物質的な現実性を有していたものである。だがこの原始的な思考を克服した近代人は無気味さを感じることはないという。後者は、去勢コンプレックスや母胎回帰空想といった心的現実性に関わり、物質的な現実性は問われず、抑圧されたものの回帰だけが問題となる。ただ近代人はすでに原始心性をほぼ克服しているがゆえ、抑圧されたコンプレックスが甦り、克服したはずの心性が改めて確認されたようにみえるとき、無気味さを感じることになる。この説明を通して、Freud,S.は「知的な不確かさ」の無気味さも、結局は自説の「抑圧されたものの回帰」によって説明可能であると主張しているようにみえる。しかし、中山(2011)は、Freud,S.の議論には錯綜がみられ、特に母胎回帰空想の議論は整合性を欠くと述べている^{vii}。また Jonte-Pace,D.(2001)は、母と死に関わる仮説とエディプス仮説の相克が、本著作に緊張を生んでいると指摘する。およそ本著作の基調をなす「知的な不確かさ」と「去勢不安」の対立は、母胎(母コンプレックス)に基づく仮死埋葬空想と、エディプス・コンプレックスに基づく去勢不安の相克にも重なっていないか。第2章末から第3章への展開に、我々はFreud,S.にとって無視できない「仮死」の問題が再び擡頭してきた徴証を見る。つまり、母胎(母コンプレックス)との関連でFreud,S.が仮死埋葬を捉える着想に立ち返ったことと、去勢不安説への固執が、議論の錯綜の一因として考えられるのである^{viii}。

5. 1923年以降 — 「死せる父親との同一化」としての仮死

1923年の『自我とエス』で、Freud,S.は新たな心的構造論を打ち建てる。そこで「死の不安」は自我と超自我のあいだに生じる「去勢不安の加工物」(GW13:289)と見做され、二次的な扱いを受けるようになる。『自我とエス』(1923)や『制止・症状・不安』(1926)など晩年の主要著作では、仮死埋葬空想に関する言及は見られず、むしろ母胎内生活空想が前景化する。1923年はFreud,S.の二人の弟子が委員会から決裂した年であり、Rank,O.の出産外傷説とFerenczi,S.の積極療法は、エディプス期以前の母親と関係する心的過程を重んじ、より短期の分析治療を目指した点で、いずれも正統な精神分析に違背するものであった。「恐るべき子どもたち」と呼ばれた彼らの、父親をないがしろにして母親を強調するような理論と技法は、正統派の分析家たちを驚かせた(Robert1963)。その結果、1924年2月15日、Freud,S.は委員会のメンバー全員に宛てた回状にこう書くことになる。

さてここで私が困難を覚えるのは次の点です。不安を惹起させる妨害物、近親相姦を禁ずる障壁は、母胎回帰空想に対立します。この妨害物はどこから生じるのか。それは明らかに、父親、現実、近親相姦を許さない権威が代表します(Jones1957:64)。

弟子たちの離反は、母胎回帰空想をめぐるFreud,S.との見解の相違が浮き彫りになったことと関連する。『制止・症状・不安』(1926)には、そうした弟子へのFreud,S.の両義的な態度が色濃く反映されている。Freud,S.はRank,O.の出産外傷説を不安の原型と評価する一方で、母親という対象の喪失から去勢不安に繋がる道筋を詳説し、あくまで不安の根本は去勢不安にあると強調した。またペニスへの自己愛的固着を断念することと母との離別を等価とみるFerenczi,S.の見解について、Freud,S.はこれを支持しながら、しかし、「母胎回帰空想は、性的不能者(去勢の脅しによって制止された者)にとって性交の代理である」(GW14:170)と述べ、去勢不安に対する脅えに基づく退行と

して、母胎回帰を近親相姦の文脈に位置づけた。要するに、上に引用した回状にあるように、Freud,Sは母親に偏向する弟子たちを目の当たりにして、近親相姦を禁じる父親という障壁を対立させたのである。では、母親を厳しく斥ける動向の中、仮死埋葬空想はどのように扱われていくのだろうか。

『ドストエフスキーと父親殺し』(1928)で、Freud,Sは文豪 Dostojewski の癲癇発作を神経症として考察したが、そこで問題とされたのは、癲癇発作が出現する前の奇妙な発作である。Freud,Sによれば、この発作には死の意味があり、死の不安をもって始まり、それが最高潮に達すると昏睡病のような睡眠状態を呈したという。そして、幼い頃から Dostojewski は、「夜に仮死状態に似た眠り(Scheintodähnlichen Schlaf)に落ちるかもしれないが、そのときは5日経ってから埋葬してくれ」というメモ書きを弟のアンドレ(Andree)に残して寝ていたとされる(GW14:406)、すなわち、この奇妙な発作は、仮死埋葬空想と繋がっており、Freud,Sはここで再び目を向けたのである。本著作において、Freud,Sは仮死状態の発作を「死者との同一化」(GW14:406)と解釈する。仮死状態は、父の死を願う息子による、その父親との同一化の機制によって引き起こされ、また死の願望を抱いた息子自身がその父親となって死んだ状態になることも意味するという。後者の機制は Dostojewski の同性愛的性格によって強化される。すなわち、彼は父親に対する死の願望だけでなく、母親のように父親から愛されたいという同性愛的願望も去勢不安のため抑圧せざるを得ず、その結果、唯一彼が許されるのは、自己懲罰としての父親との同一化である。Freud,Sはこう述べている。

幼い頃からの「仮死発作」の症状は、超自我が自我に罰として、父親との同一化を認めたため起こったと理解される。すなわち、お前は父親を殺して父親になり代わろうとした。今、お前はその願ひ通りに、その父親となった。だが、それは死んだ父親なのだ(GW14:409)。

かつて仮死埋葬空想を母胎内生活の観点から論じ、そこに「母親との同一化」の過程を捉えていた Freud,Sの思考は、今や仮死埋葬(仮死状態)を「死せる父親との同一化」に基づく空想として解釈する。かつて狼男にも見出されたような同性愛的な態度も、Dostojewski においては超自我によって抑圧され、仮死埋葬は「自己懲罰」を意味することになり、母胎内生活空想と結びつけられない。また癲癇の前駆症状において一瞬体験される「最大の至福」(GW14:410)も、Freud,Sは父親への死の願望が成就した結果の快楽とみなし、最大の快楽と不安の座に「母胎」は置かれぬ。なお1938年に執筆が開始され、1940年に発表された未完の遺稿『精神分析学概説』のなかで、Freud,Sは「出生と同時に、その放棄された子宮内生活へ帰りたいという本能すなわち睡眠本能が生じたというのは正しい。睡眠とはこのような母胎への回帰なのである」(GW17:88)と述べているが、母胎内生活空想は「仮死」の主題から論じられていない。すなわち、ついに仮死埋葬空想は、エディプス・コンプレックスのなかに、完全に回収されたように思われるのである。

さいごに

本稿は、仮死埋葬空想に関わる Freud,Sの思考を辿り、精神分析理論の形成への関与を跡づけた。精神分析が真に誕生する以前から、この無気味な空想は神経症理論の一つの柱を成し、揺籃期には性よりも死と固く結ばれた恐怖症として、ヒステリーの病因論のなかに暗に組み込まれていた。世紀末を挟んだ20世紀初頭、Freud,Sは死と性を同時に孕む母胎の象徴を見出し、仮死埋葬空想をそ

こに接合させ、母コンプレックスを解釈の中心に置いた。だがエディプス・コンプレックスという新たな死と性の心的結合が精神分析の礎石に据えられると、1910年代に、仮死埋葬空想は父親に対する死の願望と去勢不安に結ばれ、死せる父の夢表象にその姿を変えていく。それでも仮死の主題は『無気味なもの』で再浮上し、生死の境の不確実な状態が醸す感情に無気味さを捉えた Jentsch, E. の見解は、かつての仮死埋葬空想を Freud, S. に彷彿とさせ、その思考を混乱させていく。そして、母胎回帰空想が去勢不安に対する防衛に還元されるに至り、仮死埋葬空想の方は「死せる父との同一化」の機制に基づく超自我の産物に移され、エディプス・コンプレックスに完全に取り入れられるのである。こうしてみると、精神分析理論の形成過程において、仮死埋葬空想が常に Freud, S. の無意識の思考を揺さぶり、ヒステリーの神経症論やエディプス・コンプレックスや死に関わる諸理論に対して影響を及ぼしていった様相が窺えるだろう。したがって、精神分析における「死」について再考する上で、「仮死」という視座は極めて重要な意義を有するものと考えられる^{ix}。

最後に残された課題を4点述べたい。第一は Freud, S. における仮死埋葬空想の起源である。本稿は主に理論的変遷に着目したが、Freud, S. 自身の「死の不安」という問題(Schur 1972)と絡めて、その個人史から仮死埋葬空想の起源を探ってみたい。この探究はまた、Freud, S. はなぜ母と死の接近について母胎内生活空想の視点からしか論じなかったのか、という根本的な問題提起にも繋がると思われ、Freud, S. 自身の母親との関係や個人史も迫りつつ、「仮死」の視座から「母と死」の主題を再考してみる価値もあるだろう。第二は原光景や死の欲動との関連である。本稿では十分論じる余裕がなかったが、性の快楽と死の不安の起源に仮死埋葬空想が関わるならば、原光景や死の欲動と絡めて考察する必要がある。特に Freud, S. の後期理論を考慮に入れた再考が不可欠であろう。第三は、喪の作業と仮死埋葬空想の関わりについてである。「死者との同一化」は本稿における一つの論点であったが、喪の作業との関連で「仮死」はいかなる意義を有するのか、探究してみたい。第四は Freud, S. 以後の仮死埋葬空想の行方である。晩年の Freud, S. は仮死埋葬空想に殆ど言及しなくなるが、この探究を正統に引き継ぐのは英国対象関係論である。Klein, M. は「死の本能が内的に働くことから生じる危険が不安の最初の原因である」と述べ(Klein 1948)、自我と超自我のあいだで生じる死の不安を「去勢不安の加工物」(GW13:289)と見做した Freud, S. に対して、死の不安こそ根本にあると主張し、精神分析理論における「死」の理解を発展させた。特に Klein, M. とその後継者の多くが、仮死の問題を論じている点は示唆に富むだろう(Klein 1935; Winnicott 1935; Joseph 1959; Guntrip 1962)^x。ここに前エディプス期・母コンプレックスと仮死埋葬空想の関係を探究する糸口と、また分析実践における仮死埋葬空想の意義を探る余地が残されている。

文献

- Ariès, P. (1975) : *Essais sur l'histoire de la mort en Occident du moyen âge à nos jours*, Éditions du Seuil, Paris. 伊藤 晃・成瀬駒男訳 1983 死と歴史 - 西欧中世から現代へ。みすず書房。
- Binswanger, L. (1956) : *Erinnerung an Sigmund Freud*, Bern. 竹内直治・竹内光子訳(1969): フロイトの想い出。In : フロイトへの道 - 精神分析から現存在分析へ。岩崎学術出版社。1-138
- Britton, R. (2003): *Sex, Death, and the Superego: Experiences in Psychoanalysis*, H. Karnac books Ltd., 豊原利樹訳 (2012) : 性、死、超自我 - 精神分析における経験。誠信書房。
- Ellenberger, H.F. (1977): *Histoire d'Emmy von N. Étude critique avec documents nouveaux*. L'Évolution psychiatrique,

富松：仮死埋葬空想の精神分析理論

42:519-540. 中井久夫訳(1999):エミー・フォン・Nの物語—新発見文書による批判的研究. エランベルジェ著作集1. 236-266

Freud,S.& Breuer,J. (1895): *Studien über Hysterie*. G.W.I. 75-312.

Freud,S. (1900): *Die Traumdeutung*. G.W.II-III. 1-642.

Freud,S. (1911): *Formulierungen über die zwei Prinzipien des psychischen Geschehens*. G.W.VIII. 229-238.

Freud,S. (1913): *Totem und Tabu*, G.W.IX.

Freud,S. (1916-1917): *Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse*, G.W.XI.

Freud,S. (1917): *Trauer und Melancholie*, G.W.X.427-446.

Freud,S. (1918): *Aus der Geschichte einer infantile neurose*. G.W.XII. 27-157.

Freud,S. (1919): *Das Unheimliche*, G.W.VII. 227-268.

Freud,S. (1920): *Jenseits des Lustprinzips*, G.W.VIII. 1-69.

Freud,S. (1923): *Das Ich und das Es*, G.W.XIII. 235-289

Freud,S. (1926): *Hemmung, Symptom und Angst*, G.W.XIV. 111-205

Freud,S. (1928): *Dostojewski und die Vätertötung*, G.W.XIV. 399-418

Freud,S. (1940): *Abriss der Psychoanalyse*, G.W.XVII. 63-138

Freud,S. (1986): *Brief an Wilhelm Fließ 1887-1904*, Fischer Verlag Frankfurt am Main, 河田晃訳(2001):フロイト フ
リースへの手紙 1887-1904. 誠信書房

Gay,P. (1988): *Freud—A Life for Our Time*, W.W.Norton & Company. 鈴木晶訳(1997):フロイト. みすず書房.

Guntrip,H. (1962): *The Manic-Depressive Problem in the Light of the Schizoid Process*, Int. J. Psycho-Anal.,43:98-112.

Isaacs,S.(1952): *The Nature and Function of Phantasy*, Int. J. Psycho-Anal., 29:73-97

Jones,E. (1957): *The Life and Work of Sigmund Freud*, Volume Three: The Last Phase 1919-1939, The Hogarth Press.

Jonte-Pace,D (2001): *Speaking the Unspeakable*, University of California Press

Joseph, B. (1959): *An Aspect of the Repetition Compulsion*. Int. J. Psycho-Anal., 40:213-222.

Klein, M. (1935): *A Contribution to the Psychogenesis of Manic-Depressive States*. Int. J. Psycho-Anal., 16:145-174.

Klein, M. (1948): *A Contribution to the Theory of Anxiety and Guilt*. Int. J. Psycho-Anal., 29:114-123.

Laplanche,J. et Pontalis,J-B (1973): *Vocabulaire de la Psychanalyse*, Presses universitaires de France, 4^e édition revue,
村上仁監訳(1977):精神分析用語辞典. みすず書房

Laplanche,J. et Pontalis,J-B. (1985): *Fantasma originaire Fantasma des origines Origines du fantasme*, Hachette. 福
本修訳(1996):幻想の起源. 法政大学出版局

中山元(2011):解説—フロイト晩年の二つの仮説. In: ドストエフスキーと父親殺し／不気味なもの. 光文社. 282-329

Robert,M.(1963): *La révolution psychanalytique: La vie et l'œuvre de Freud*, Editions Payot, 安田一郎・安田朝子訳
(1976):精神分析革命—フロイトの生涯と著作—〈下〉. 河出書房新社.

Schur,M.(1972): *FREUD:LIVING and DYING*, International Universities Press, Inc.. 安田一郎・岸田秀訳(1978):フロ
イト - 生と死 〈上〉〈下〉. 誠信書房.

富松良介(2013): ねずみ男の屍体凌辱空想と Freud,S.の解釈の方向性に関する一考察. 京都大学大学院教育学研究科紀要.
59, 443-455

Winnicott, D.W. (1935): *The Manic Defence*. In: Winnicott, D.W. (1975): *Through Paediatrics to Psycho-Analysis*. The
Hogarth Press and the Institute of Psycho-Analysis.

(心理臨床学講座 博士後期課程3回生)

(受稿 2013 年 9 月 2 日、改稿 2013 年 11 月 28 日、受理 2014 年 1 月 16 日)

註

i 本稿では、「生き埋めにされる(scheintot begraben zu werden)」という原語の scheintot(仮死)の持つ、生死の両義的なニュアンスを強調するため、単なる「生き埋め空想」ではなく「仮死埋葬空想」なる語を用いる。また「空想」と「幻想」の用語選択は議論が分かれるだろう。Isaccs,S.(1952) は白昼夢のような意識に近い空想を fantasy、無意識的な空想を phantasy(幻想)と呼んで区別したが、この語用に対しては、空想の原因を欲動に還元している、空想の内容に偏向し構造の視点を欠くといった批判もある(Laplanche&Pontalis1985)。本稿では専ら無意識的空想を指して「空想」の語を使用する。

ii エミー夫人の治療は、1889年5月1日から6月17日までの7週間と、中断を挟んだ後の8週間行われたとされる。しかし後の経過を辿ると、実際は1888年5月1日に始められたとする説が有力である。但し、従来謎に包まれていたエミー夫人の人物像や家族歴などを綿密な調査によって詳らかにした Ellenberger,H.F.(1977)は、Freud,Sの記述した通りの1889年5月1日開始の説も否定していない。

iii 筆者は、Freud,S.の神経症理論における「死と性」の問題について、死を避けるように性をヒステリーの起源へ置こうとする Freud,S.の解釈の方向性を見出し、個人史や分析実践も含めて Freud,S.に内在する屍体(死者)への抵抗について論じている(富松 2013)

iv 「死の不安」の問題に若干触れておきたい。分析史上、死の不安を探究した先駆は、Freud,S.よりもむしろその弟子たちであった。Stekel,W.や Federn,P.や Spielrein,S.はその代表である。だが神経症の病因を死の不安に一元化しようとする弟子たちに対して、師 Freud,S.は一貫して批判的な立場を取っていた。たとえば、Spielrein,S.の死の不安理論と Freud,S.の理論の差異に関しては Britton,R.(2003)に詳しい。

v 「荒唐無稽な夢」の節には、死者に纏わる夢ばかりが並んでいる。Freud,S.の亡父がマジャー人(マジャール人)を政治統一する夢、父を亡くした患者の夢、亡きゲーテから論文を批判される知人 M 氏の夢などが検討素材とされる。

vi ヴェールが破れるということは、狼男がこの世界に再び出生することも意味する。Freud,S.はこれを「再出生空想(Wiedergeburtphantasie)」と呼称する。再出生空想は男性的な態度による母親との性交の願望によるものとされ、母胎回帰空想とちょうど対の関係にあるという。Freud,S.はこの再出生空想こそが狼男の治療の鍵を握っており、また原光景を組織づけていると考えている。本稿ではこの再出生空想(原光景)と仮死埋葬空想の関係を論じる余裕はないが、死と性の問題を探究するにあたって重要なテーマとなることを付言しておく。

vii 中山(2011)は、Freud,S.の区別した無気味さの「体験」と「想像」の二系列から母胎回帰空想を分けて第三の系列とすべきであること、死の恐怖が母親に基づく異質な性欲動に帰されて考察に筋えが見られること、また Freud,S.が真に眼を背けた対象は母胎ではなく母親(女性)の性器であることなどを看破している。

viii 『無気味なもの』とほぼ同時期に書かれた『快感原則の彼岸』(1920)で、Freud,S.は欲動論を刷新し、死と性の欲動の混融した人間存在を描いた。本稿は「死の欲動」と仮死の関連を論じる余裕はないが、死の欲動をめぐる思弁は、Freud,S.の『無気味なもの』における思考の矛盾を止揚させる試みにも見える。

ix Freud,S.は『トーテムとタブー』(1913)で古代から死と人間の関係は不変としたが、Ariès,P.は死をめぐる心性の歴史的な変遷を跡づけている。西欧世界では、古代から人類は死と親密な関係を保っていたが、18世紀末に日常的な死と親密さとの間で「断絶」が生じる。Ariès,P.(1975)によれば、この断絶の間には一つの橋が存在し、「それは生きたままで埋葬されることへの恐怖と仮死の脅威」(伊藤・成瀬訳 p.136)である。仮死の恐怖は、死の恐れを人間が受け容れる表面上の最初の形態であり、次に死者とその遺骸の再現への嫌悪が生じ、さらにそれらを想像することへの嫌悪が生まれたという。その時点で人間は初めて今日的な意味で死を怖れ始める。Freud,S.の仮死埋葬空想は、そうした意味でも、死を怖れる近代人の姿を適確に描いているかもしれない。なお、仮死埋葬の問題は「土葬」やユダヤ・キリスト教の復活の教義とも関わっている可能性も考えられる。

* たとえば Klein,M.は初期の主要論文『躁うつ状態の心因論に関する寄与』(1935)で、躁病における否認と万能感を考察する中で仮死状態に言及している。Winnicott,D.W.(1935)は、躁的防衛を内なる現実(inner reality)に対する否認とみなし、その特徴に仮死状態を掲げている。Joseph,B.(1959)は反復強迫の受動的な側面を考察した論文で、臨床事例を挙げて仮死に言及している。また Guntrip,H.(1962)は躁うつ病をシゾイドの射程から捉えた論文で、生き埋め(buried alive)を怖れる躁うつ病患者の事例を挙げている。

Psychoanalytic Theory on the Fantasy of Being Buried Alive

TOMATSU Ryosuke

This paper explores the uncanny fantasy of being buried alive, which S. Freud continues to refer to throughout his psychoanalytic theory and history. Before the birth of psychoanalysis, in the case of Emmy von N. in “Studies on Hysteria,” Freud considers this fantasy from the viewpoint of trauma, which implies not sexuality, but death. Next, between the end of nineteenth century and 1909, Freud connects the symbol of the mother’s womb to the fantasy of being buried alive concerning the mother complex. While Freud emphasizes the oedipal complex in 1910s, this fantasy is replaced by the dream figure of the dead father. In Freud’s article “The Uncanny,” there is conflict between Jentsch’s concept as “intellectual uncertainty” and Freud’s concept as castration anxiety. It is considered that this conflict is the same as that between the fantasy of being buried alive based on the mother complex and castration anxiety based on the oedipal complex. Then, after 1923, Freud regards the fantasy of being buried alive as a regressive phenomenon, which occurs in incest taboo. Finally, in the context of the oedipal complex, Freud interprets this fantasy wholly from the viewpoint of identification with the dead father.